

ブルーノ・タウト設計による円形住宅 「チーズ・カバー」

田中 辰明

お茶の水女子大学
生活環境教育研究センター名誉教授

柚本 玲

お茶の水女子大学
田中辰明研究室

(株)工文社 **建築仕上技術** 2009年2月号より



ブルーノ・タウト設計による円形住宅 「チーズ・カバー」

お茶の水女子大学

生活環境教育研究センター名誉教授 田中 辰明

お茶の水女子大学

田中辰明研究室 柚本 玲

はじめに

ブルーノ・タウトはベルリンに第一次世界大戦後、多数の集合住宅を建設し、社会主義建築家として名を成した事を本誌で紹介した¹⁾。1933年に来日するや『日本美の再発見』、『日本文化私観』、『日本-タウトの日記』など多数のエッセーを残し、文筆家として認められる。社会主義建築家の前は実は表現主義の建築家として「ガラスの家」「鉄のモニュメント」を発表し、名を成している。「表現主義」から「社会主義」、そして「日本美の再発見」と実に変わり身の早い建築家であった。

表現主義の建築家であった時代の作品としてヴォルプスベデー(Worpswede)という村に愛称チーズ・カバー(Käseglocke)と呼ばれる個人住宅を残している。タウトの作品は主に集合住宅であるので、極めて珍しい例である。本報では2008年10月に筆者らが行ったこの住宅の調査を報告する。



写真1 ブレーメン市庁舎

ブレーメンに行つて音楽士になろうと思ったロバ、犬、猫、ニワトリが結局ブレーメンには行けなかったという話であるが、この像がブレーメン市庁舎前(写真1、写真2)に建っている。何でも一番下にいるロバの足に触れると幸せが来るという伝説があり、脚の部分だけ磨き上げたように光っている。



写真2 ブレーメンの音楽隊

ヴォルプスベデーはこのブレーメンとブレーマースハーフェンの間にある。筆者らは平成20年10月の初頭ブレーメン中央駅から赤茶に塗られた私鉄電車に乗り、ヴォルプスベデーへ向かった。電車は沼沢地特急(Moorexpress)と呼ばれ途中の小さな駅には停車しない。そもそもドイツでは私鉄は珍しい。中央駅のインフォメーションにて何処で切符を買うのか尋ねた。「まず電車に乗り、車内で車掌から購入してくれ」との事。電車はドイツ鉄道(わが国で言うJR)と共通のホームから出る。古めかしい2両編成の車両内部には木製の長い椅子が進行方向に取り

1. ヴォルプスベデー(Worpswede)

ヴォルプスベデーという村がドイツにあると言っても何処にあるのかご存じない読者が大方であろう。この村はブレーメン(Bremen)の北20kmくらいのところにある。ブレーメンはドイツの北部、ヴェーザー(Weser)河沿いにあり、ドイツではハンブルク(Hamburg)に次ぐ大きな港町である。しかしヴェーザー河が注ぐ北海(Nordsee)からは50kmも陸地に入ったところなので、港町という賑わいは感じられない。ヴェーザー河が北海に注ぐところにはブレーマースハーフェン(Bremershafen:ブレーメンの港)という町があり、第二次大戦で近隣諸国を震撼せしめた潜水艦ウーボート(U-Boot)が今でも係留され、内部の見学ができる。

ブレーメンと聞くとブレーメンの音楽隊を思い出す。



写真3 ヴォルプスベエデ駅(フォージェラー設計)²⁾

付けられている。出発まで待ったが、乗客は我々3名の他は一組の夫婦のみという状態であった。列車が走り出すと早速車掌が切符を売りにきた。「ヴォルプスベエデ3枚だな」と念を押し、代金と交換に切符を渡すと、これで仕事は終わったとばかりに運転手の横に座り、朝食の弁当を広げだした。何とものどかな車内風景である。わが国の現在のように効率主義が優先するとこのような私鉄は廃線になるか、少なくともワンマンカーになるであろう。

列車はどうしようもない湿地帯をまっしぐら北へ進む。時々牛や馬を飼う農家が見えるが、正に荒野である。この地域は悪魔の沼沢地(Teufelsmoor)と呼ばれている。開墾が大変であった土地に相違ない。沼沢地には時々池や湖が現われる。湿地帯には荒野に生育するエリカがまさに枯れんとしてどこまでも広がっている。夏には可憐な花を咲かせてくれたのであろう。そう言えば、ブルーノ・タウトと共に高崎の少林山達磨寺で2年3ヶ月の生活を送り、タウトの著述を助けた伴侶もエリカといった。我々はつい先日ベルリンの馬蹄形住宅の近くでエリカの墓石を見つけ出し、参拝した事を思い出した。ドイツの秋の天候は不安定で、プレーメンで降り出した雨は電車が北に進むにつれて本降りになってきた。朝食を終えた車掌に促されてヴォルプスベエデ駅で電車を降り、地図を頼りに緩やかな山道を登ってタウトの作品チーズ・カバーへ向かった。このヴォルプスベエデの駅舎は1910年に画家で建築家でもあったハインリッヒ・フォージェラー(Johann Heinrich Vogeler(1872~1942))により設計されたユエグントシュティール(Jugendstil: わが国ではアールヌーボーの方が通じやすい)の建造物



写真4 ヴォルプスベエデの村役場



写真5 ヴォルプスベエデのバルケンホフ

である(写真3)。

ヴォルプスベエデは周辺一体が平坦な荒野であるにもかかわらず、緩やかな丘を形成している。19世紀の終わりから作家、画家、詩人、彫刻家などの芸術家が集まり、芸術活動を行った村として知られる。現在でもこの地方独特の民家が点在し、村の中心にはギャラリー、美術館、陶器、装飾品の店が点在する。チーズ・カバーへ向かう途中ややモダンな建物に行き着いた。これが何と村役場であった(写真4)。ここには「用事のある方はここに電話してください」と村長のメッセージがあった。雨にぬかるむ山道を歩いてチーズ・カバーを目指す、そもそも道案内も不確かでなかなかたどり着けない、その内にバルケンホフ(Barkenhof)と呼ぶ駅舎を設計したハインリッヒ・フォージェラーのコレクションがある住宅にたどり着いてしまった。我々はあくまでもチーズ・カバーを目指すのだが、雨宿りもかねてここを見学した(写真5)。村ではチーズ・カバーよりもバルケンホフに観光の力を入れているようで、訪問者も多かった。建物内でもフォージェラーの一生をビデオで紹介するなど訪



写真6 チーズ・カバの外觀

写真7 チーズ・カバ
1階にある暖炉写真8 チーズ・カバ1階居間
から2階への階段

写真9 チーズ・カバ2階の居室

問者の扱いに慣れている。寒い雨に降られて、滑りやすい山道を乗り越えてやっとたどり着いたのでもう少し欲待してもらえるかという甘い期待とは裏腹に「写真撮影は駄目ですよ、カメラはここに預けて！」と客扱いもやや手荒い。

2. チーズ・カバ(Käseglocke)

10月初旬降雨の山道、それも初冬といって良い寒さである。ヴァイアーベルク(Weyerberg)と呼ぶ山の山道を歩いても「チーズ・カバ」という道標は無くなかなかたどり着けない。しかも何の案内板も無く山道は左右に分かれる。いったいどっちへ進んだら良いのだろうか？偶然にも山道を下るとレストランがあった。仕方が無く遅めの昼食をとり一休みすることにした。そこで再び元気を取り戻しレストランの店主にチーズカバへの道を聞き、やっと訪問することが出来た。相変わらず、降り続ける寒い雨の中、落葉しつつある木々の中にチーズ・カバらしき住宅を見出したときには、思わず「バンザ

写真10 チーズ・カバ2階の
客室写真11 チーズ・カバ
1階の厨房器具

イ！」と叫びたくなった。写真6にチーズ・カバの外観を示す。

建物内では我々にボランティアの案内人がつき、丁寧に説明をしてくれた。この住宅は文筆家エドヴィン・ケンネマン(Edwin Könnemann(1883~1960))がブルーノ・タウトに設計を依頼したもので、1926年に建設された。タウト自体はマクデブルク(Magdeburg)で行われた展示会に展示したもので1921年に設計されたものである。これ自体は当時の建築雑誌(Frühlicht:曙光)に掲載された。これをケンネマンが気に入り、ヴァイアーベルクの山に建てたそうである。



写真12 チーズ・カバー2階アトリエのフリッツ・ウプホフの収納庫



写真13 チーズ・カバー前の入り口越しに見た庭園

半円球のドーム型をし、地下室の基礎とレンガ積み暖炉を除くと完全な木造である。地上2階、地下1階である。1階の直径はほぼ10m、2階は当然それよりも短くなる。1階にある暖炉は彫刻家カール・ピーニング(Karl Piening)により設計され、ペチカのような構造で、この空気をまわすことで、住宅のどの部屋も暖房が出来るように工夫されている(写真7)。屋根部分の断熱性能が不足していたので、夜間放射による冷えも大きかったらしく、1998年の大修理の際に断熱が補強された。

1階の南にある玄関を入ると風除け室に入る。その左右にトイレがあり、左側(西側)には厨房、その奥に浴室がある。右には現在陳列室になっている、かつての居間がある。居間から階段が2階に上っていく(写真8)。写真9のように2階の壁は曲面となっている。奥の北側は主寝室である。2階には客室が2部屋あり、南側にはアトリエがある。客室といってもそれぞれ1名が使用できる造り付けベッドがあるのみである(写真10)。また収納室も2階にあり、そこは人が歩行可能になっている。写真11のように1階の厨房に設置されている厨房器具は当時のままである。これは筆者らが空気調和・衛生工学会論文報告集に2007年に報告したものと酷似している³⁾。

現在この住宅は芸術作品の展示にも使用されておりさりげなく陶磁器、絵画、椅子などが置かれている。特にアトリエに置かれたフリッツ・ウプホフ(Fritz Uphoff)の赤く彩色された収納庫(1922年頃の作品)は圧巻であった(写真12)。芸術品の椅子もそこに置かれるのが最適であるとばかりにこの住宅に調和している。住宅の周囲は庭園があり周囲の山地に繋がっている(写真13)。その境にはレンガを積んだ低めの壁が使用されている。

ケンネマンの死後一時この住宅は荒廃したが、修復

工事が行われ、しっかり復元されたので、現在では記念保護建築物に指定されている。

終わりに

筆者が大学で建築を勉強した際にいつも教官から「建築は決して平面でない、立体であるのだから粘土でも良いから模型を作り空間を考えなさい」と口うるさく教わった。確かにこのチーズ・カバーを見ると立体で考えない限り、部屋は収まらない。お茶の水女子大に籍を移し、住居学を担当していたが課題では時間の制約から住居の平面図、立面図、断面図などを要求していた。これでは素晴らしい設計は出来ない。学生に申し訳ないことをしたと反省する次第である。

注記: タウトが建築雑誌Frühlicht(曙光)に発表し、マクデブルグ(Magdeburg)の展覧会に出展した円形住宅がある。これは「市営公園の家」という題がついている。これを図1に示す。またその前年の1921年にはマクデブルグの「公園監視建物」を円形で設計している。これを図2に示す。

また本誌2007年11月号で「ブルーノ・タウトの業績と旧宅の保存事業」という題で報告したダーレピッツの住宅は1926年から27年にかけて建設されたが、これも円形のケーキを1/4に切ったような形をしている。しかしこれらにもモデルがあり、AEGタービン工場を設計したペーター・ペーレンス(Peter Behrens(1868~1940))が1904年に「小さな夏の家」を円形住宅で設計している。これを図3に示す。これらの出展は文献10の1980年にベ

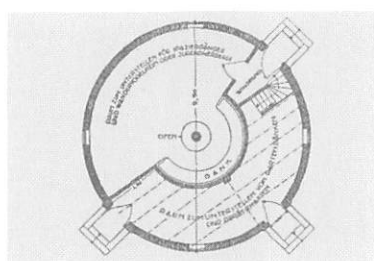
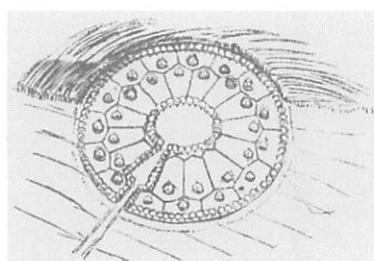
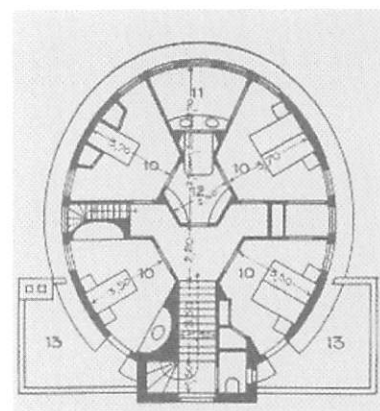
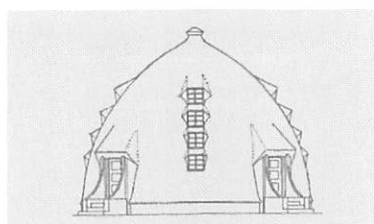
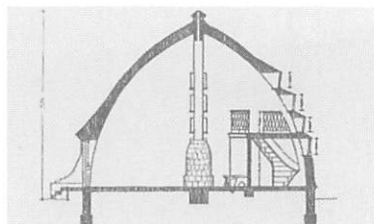
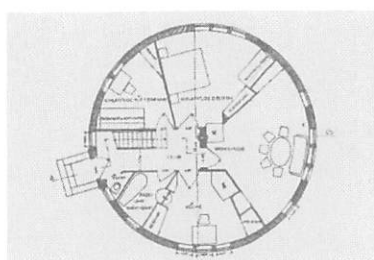
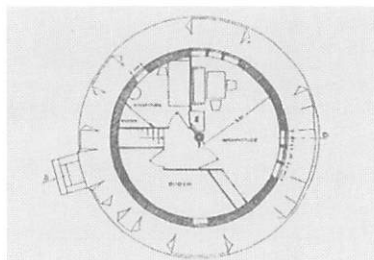
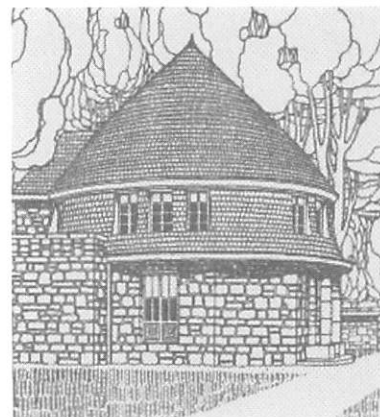
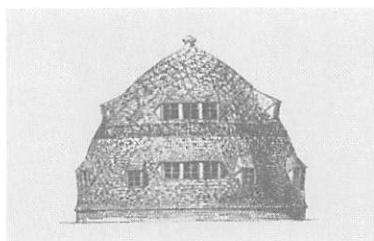
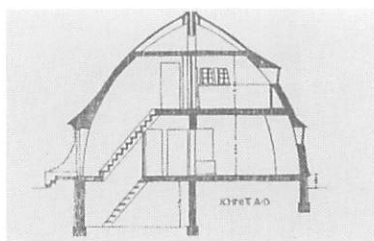


図1 市営公園の家(ブルーノ・タウト、1922年)

図2 公園監視建物(ブルーノ・タウト、1921年)

図3 小さな夏の家(ペーター・ペーレンス、1904年)

ルリンで行われたブルーノ・タウト展のカタログによる。またさらにドイツの有名建築家ダビド・ギリー(David Gilly (1748~1808))も円形住宅を発表している。

謝辞

この調査には同行してくれたお茶の水女子大学大学院生で住居学を専攻する安達香里さんの協力を得た。記して謝意を表す。平成20年度科学研究費補助金(課題番号20700575)、財団法人鹿島学術振興財団からの2007年度研究助成を頂いた事を記して謝意を表す。

<参考文献>

- 1) 田中辰明：ブルーノ・タウトの業績と旧宅の保存事業：月刊建築仕上技術：工文社(2007/11)
- 2) <http://de.wikipedia.org/wiki/Worpswede>
- 3) 田中辰明, 平山積久, 柚本玲：鋳鉄製調理暖炉に関する調査：空気調和・衛生工学会論文集;Vol.128(2007) p.41-44
- 4) 田中辰明：朽ちかけるタウトの家：日本経済新聞朝刊文化欄(2008/7/17) 40面
- 5) 田中辰明：独タウト邸保存・恩返しへの訴え：東京新聞朝刊(2008/10/2) 28面
- 6) 田中辰明, 平山積久, 柚本玲：ブルーノ・タウト(Bruno Taut)の作品と建築設備の変遷：空気調和・衛生工学会論文集;No.136(2008) p.1-5
- 7) 柚本玲, 平山積久, 田中辰明：ブルーノ・タウトが設計した住宅の暖房設備に関する調査研究：2008年度日本建築学会学術講演会：(2008/9/19) p.1327-1328
- 8) 田中辰明, 柚本玲：ブルーノ・タウトがベルリンで設計した集合住宅：日本家政学会第59回大会(2007/5)
- 9) Winfried Brenne: Bruno Taut, Meister des farbigen Bauens(Taschenbuch), Verlagshaus Braun; Auflage: 1(2005/5)
- 10) Ausstellung der Akademie der Künste vom 29. Juni bis 3. August 1980 "Bruno Taut" (1980)